

10. 古今著聞集『小式部内侍が大江山の歌の事』

最初の方でクラッシーが開けず、左の内容がノートに書けなかった人、ノートに書いてく  
ださい。

【ノートに記入】

和泉式部、保昌が妻にて丹後に下りけるほどに、京に歌合ありけるに、小式部  
内侍、歌よみに下りわけてよみけるを、定頼の中納言、たはぶねに小式部内侍に、  
「丹後へつかはしける人は参りにたりや。」と言ひ入れて、局の前を過ぎられけ  
るを、小式部内侍、御簾よりなかは出でて、直衣の袖をひかへて、

大江山いへの道の遠ければまだふみもみず天橋立

とよみかけけり。思はずにあやまらむ。「うはらかに。」とばかり言ひて、返こ  
にも及ばず、袖をひきはなちて逃げらわたりけり。小式部「これより歌よみの世お  
ほえ出で来にけり。」

【語彙】

下りけるほどに…都から地方へ赴任したころ、  
歌よみに下りわけてよみける…歌合の読み手にえらばれた  
たはぶねに…ふねに  
つかはしける人…使いとしていかせた人  
参りにたりや…戻って参られましたか  
ひかへて…引き止めて  
思わず…思いがけなく  
あやまらむ…驚きあきれ  
こはらかに…これはどうした  
おほえ出で来にけり…世の評判がでてきた

ノートの本文に線を引き語彙を左横に記入する。(右は読み)

あやまらむといぬなをわこ。

11. 古今著聞集『小式部内侍が大江山の歌の事』

前回 和歌の解釈まで。あと一息で終わりです。

今回 このエピソードが有名になったわけ

前回、嫌味を言った定頼に対して、小式部内侍が反撃の和歌をかえました。  
定頼の嫌味に対して、当意即妙の素晴らしい返しでした。

ポイントは

自分の言いたらいことが十分込められている。  
技巧がらんだんに使われている（掛詞、縁語、枕詞、倒置）。  
速攻！

定頼は驚きません。 じまはまうごういんじだー

① 定頼はもよおせぬかきかたのこころ、いづれかかかたのこころ。② 返つても及ばず、袖さくら花なびく迷ひ  
らむこころ。

質問4 ☆解答は必ず「ノー」で書きましょう。自分で解いてかひの答に入らなければなりません。

1、①は「はむこころ」の意味か。

ポイント・語意参照

2、なぜ、定頼は②のような行動をとったのか。次の三つの条件を念頭に答えよ。ちなみに「返つても及ばず」「は」「返歌をすぬいともできぬは」。

A 小式部内侍を親の七光り、と侮っていた。

B 必ず返歌するところが当時の作法

C 返歌の出来がその人の教養（優劣）を表す。

【解説】

1 ↓ 思いがけない（素晴らしい和歌で返されたので）驚きあきれて

2 ↓ 小式部内侍が、こんな素晴らしい和歌を瞬時に返してはるやうな予想しておらず、返歌できなかつたから。

【解説】

定頼の父は当時の和歌の神様。

当然、定頼にも和歌の自負がある。一世と一世の誇りがある。このエピソード、小式部内侍は、「歌よみの世おほえ玉出来らす」

↓ 歌人として世の評判を得ることになった。

次ページへ

## 12 古今著聞集『小式部内侍が大江山の歌の事』

☆現代語訳を確認しましょう。解答を載せます。

和泉式部が、「藤原」保昌の妻として丹後の国に下ったときに、京で歌合があったが、（その娘）小式部内侍が、歌合のよみ手として選ばれてよむことになったが、「藤原」定頼の中納言が、からかって小式部内侍に、「丹後へおやりになったという使いは戻って参っているか（母上の和泉式部の助けがなくてお困りでしょう）」と（小式部内侍の私室に）声をかけて、部屋の前を通り過ぎなざったところ、小式部内侍は、御簾から半分ほど出て、（定頼の着ている）直衣の袖を引き止めて、

大江山……大江山、生野という所を通って行く、丹後への道が遠いので、まだ天橋立を訪れたことはございません。そのように、母のいる丹後は遠いので、まだ使りもございません。

と（定頼に歌を）よみかけた。（定頼は）思いがけないことであきれて、「これはどういうこと。」とだけ言って、（当然の作法である）返歌することもできず、（引き止められた）袖を振りきってお逃げになってしまった。小式部は、このことにより歌人としての世の評判が出て来たそうだ。

### 【文法】

☆①と②の動詞に線を、形容詞に二重線を引きましょう。

- ① 思はずにあさましへ
- ② 袖をひきはなちて

	(解答)	
	形容動詞「ナリ活用」	形容詞「シク活用」
① ↓	思はず	あさましへ
	名詞 格助詞	動詞「四段活用」 接続助詞
② ↓	袖を	ひきはなちて

☆文章を単語に分解できるようになっておきましょう。

次回は漢文です。